

# 霊操第 29 回 弟子の派遣 2022 年 1 月 7 日 配信 担当 柴田潔神父

聖書箇所 マタイ 10：1～25、ルカ 9：1～6、

はじめの祈り 主の祈り ルカ 11：1～4

宣教の現地教育の最中、熱烈に祈っているイエスの姿を見て、弟子たちが「祈りを教えてください」と頼みます。

1. 宣教に必要な心構え
2. 権能を与えられた弟子たちの宣教の成功
3. 癒しの権能までは与えられていない私たちの宣教

『宣教者を育てるイエス ルカ福音書による黙想』 カルロ・マリア・マルティーニ著 今道遥子訳 女子パウロ会 1988年 一部表現を変えています。

## 1 弟子の教育 ルカ 5：1～9：50

4 章：福音宣教に失敗したイエスの導入。この部分は受難と死を含めて、ルカの基本的テーマのすべてを含んでいる。

5 章～8 章：弟子たちの召出しという公のイエスの活動で始まる。一連の 7 つの秘跡。ナインのやもめの息子のよみがえりが頂点。短い小休止の後、もう一つの一連の奇跡。

9 章：一連の奇跡の後に、使徒たちに権威を与える。

弟子たちは、イエス様の導きで、苦しむ人々に近づく機会を得ます。世の中にどれほどの苦しみがあるか、どれほど見捨てられた人がいるのか目撃します。

イエス様は目の前の苦しむ人に連帯するように教育されます。

これまでの弟子たちは、自分たちの限られた物の見方、世界観で生きてきました。

世の中には、沢山の苦しみがあり、思いやりが必要なことに目覚め、慰めが必要な人のところに自ら出向くようイエス様は教育されました。

隣人に奉仕する訓練はとても大切で、弟子になるにはこの体験がなければいけません。

## 弟子の派遣の心構え

成熟したキリスト者の共同体は、受洗者にこのような教育を十分に施さなければいけません。これを怠ると、貧しい人に一皿の料理を提供できない人にしてしまいます。

司祭の養成に際しても同様です。学問と祈りの隔離された雰囲気は仇となることがあります。

一定期間、直接貧しい人や病人への奉仕に励むことは良いことです。

病人奉仕をおろそかにできません。特に、病気の司祭への援助が大切です。

しなければならないことが一杯あるのは事実ですが、見舞いに当てる小休止の時を決める必要があります。

病人は度々憂鬱に襲われ、恐怖の状態にあってすべてを暗く見がちですが、一度の見舞いがそういう状態を変え、落ち着きと平和を取り戻させることもできるのです。

こういう教育には終わりがありません。（イエス様の弟子たちへの、私たちへの教育）

## 2. 権能をいただいた弟子たちの働き

『あなたがたは祈るとき』カルロ・マリア・マルティーニ著 吉向キエ・池田敏雄 共訳 1983年 中央出版社  
一部表現を変えています。

### イエスの歓喜の祈り（ルカ 10：21～22）

そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼な子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに、子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかに、だれもいません。」

### イエスの歓喜

「天地の主である父よ、あなたがたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼な子のような者にお示しになりました。」 この喜びのきっかけは、72人の弟子たちの宣教の成功です。（宣教の心構えの教育が施されて派遣されます） 弟子たちは、約束の地に入るヘブライ人のように、びくびくしながら宣教に出発しました。それが思いの外うまくいったので、喜び勇んでイエスに報告します。七十二人は喜んで帰って来て、こう言います。「主よ、お名前を使うと、

悪霊さえもわたしたちに屈服します。」（ルカ 10：17） 弟子たちは、イエスのみことばに抵抗す

るものが何もないことを実感しました。人間の悪の力は、イエスのみことばの前に無力なことを

体験して帰ってきました。弟子たちの知らせに、イエスは、神のみわざへの驚きと感謝を表現しています。そして、御父への親近感を込めてこう祈ります。

「天地の主である父よ、あなたがたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼な子のような者にお示しになりました。そのことに感謝します。」

ここからが大切な点です。イエスは、ただ宣教の成功を讃えているのではありません。別の角度から見ています。“知恵ある者”と“小さい者”、  
“神の啓示が明らかにされるか”“明らかにされないか”  
という対句を使って宣教の出来事を表現しています。

「神の国の秘密」は、“知恵ある者”対“小さな者”、“隠される”対“啓示される”と対句で表現されています。その「神の国」は、啓示され、与えられたもので、知恵ある者の探求の成果ではありません。「神の国」は、神が表してくださる賜物で、人間の研究の成果ではありません。宣教に必要なのはへりくだって賜物を求める心です。

「旅には何も持って行ってはならない」(ルカ9:3)

イエス様が「何も持っていくな」と命じられる理由です。

神の国は、啓示されるものなので、心と目を閉じている人には隠されたままになります。賜物としてそれを受けないなら、隠されたまま、与えられている救いの意味、人生の意味はわかりません。このため、福音書にある盲人の願いが私たちの願いになります。「主よ、見えるようになりたいのです。主よ、あなたの秘義が隠されませんように。」

“啓示された神の国”と“隠された神の国”という対句は、神の賜物の無償性を強調します。

“知恵ある者”と“小さき者”との対句は、神の国の秘義が、自己充足している人ではなく、(神を含め)他者を必要としている者に現わされると、教えています。

他人を必要としている人には賜物を受け入れることができます。

自己充足している人は、結局は自分で何もかも知っていると思ってしまうので、秘義を受け入れられません。

マリアも対句で祈っています。

「権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。」

イエスは、72人の弟子たちの宣教活動が成功したことに喜んだというより、神のみわざの素晴らしい現れ方(共感力を養い、知識武装よりもへりくだって神からの無償の賜物を求めたことで実現した成功)に喜びあふれたのです。

### 3. 癒しの権能までは与えられていない私たちはどうしたらいいでしょう？

弱さを身に負うがゆえに マイケル・J・バックレー 1975年 アメリカのイエズス会の叙階式での説教  
神学ダイジェスト 1985年 59号P77~83 一部表現を変えています。

神学生の際に、自分は司祭に向いているのか悩んでいた時に、具神父さんが紹介してくれた記事

#### 要旨

司祭にふさわしい資質とはどのようなものであろうか？ 普通私たちは、その人がどんな業績を上げたか？ 知的能力は十分か？ 社会的な適性があるか？ 宗教心が深くて真面目な人であるか？ といったことを問題にする。しかし、バックレー氏は、そのような評価基準を越えて「この人は司祭になるだけの弱さを十分に持っているか？」が、司祭の本質的な要素だと投げかける。

司祭職とは、自ら弱さを身に負われたキリストに倣う奉仕職であり、丁度それを脅かすように見える弱さのうちこそ、人の苦しみに対する感受性が現れ、相手の心が開かれ、救いにつながる。それが司祭職の役務の本質的な奥義だと説く。

「主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることがおできになるのです。・・・この大祭司は、私たちの弱さを思いやることができないような方ではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、私たちと同じように試練にあわれたのである。・・・彼は自分自身、弱さを身に帯びているので、無知な困っている人々を、思いやることのできるのである。」（ヘブライ書 2：18、4：15、5：2）

ヘブライ書では、失敗や恐れ、挫折の体験、自分の弱さにこそ、キリストの奉仕職と司祭職を結ぶ、書かれている。司祭の召し出しには、自分の弱さ、至らなさの留まることが決定的に重要である。そうでなければ、司祭の生活は成功を追い求め、才能の開花を目指し、世俗化してしまうかもしれない。

また、弱さの理解を誤ると、自分の弱さが司祭職を脅かすものと感じて、以前の決心を考え直すしにってしまうかもしれない。(神学生の時の私もそうでした)

バックレー氏が言う弱さとは、理想に向かってできる限りの努力をしてもなお残る無能力感です。一方、無能力感を味わわずに避ける方法もある。自分の将来を脅かすことには関わらない、逆境には立ち向かわない、保証された安定した生活に留まる、恥や痛みから予め自分を守る・・・方法もある。しかし、本物の司祭(信徒も同様)になるにはイエスの生き方に倣うことが大切である。

「激しい叫びと涙とをもって、ご自分を死から救う力のある方に、祈りを捧げた」(ヘブライ5:7) イエスは、自分の弱さを身にまとして、身を守ることを徹底的に放棄されました。

弱さは、深い次元で私たちが他の人々と結びつけます。自分の弱さを知ることで、底辺から救いを希望する人たちの闘い・闇・苦渋を感じとれるのです。神の子イエスは、人間の救いのために受肉され、自分自身も「弱さを身の帯びました」。そして、人々の闇・挫折・苦渋を感じ取り、救いに与らせました。

旧約の時代、神はあまりに遠く、現実のことには関わらない方とされていた。しかし、イエスは、受肉し、人間の現実の中に入って、弱さを身にまとして自分を捧げ尽くしました。

## 挑戦

私たちも心悩ます多くの難題に、繊細さと誠実さをもって立ち向かわなければなりません。しかも仕事仲間は気難しく、長上は現場を理解してないこともあるでしょう。状況が悪く、成功の見込みもない場合もあるだろう。しかし、まさにそのような時こそ、私たちは、私たちが贖うことができるキリストのように深く現実に入り込むことができます。私たちが感じる“弱さ”は、同じ闘いの中にいる人に深い思いやりを示すための“神の恵み”なのです。

「弱さの自覚」はイエス様の弟子になる障害ではなくて、大切な資質なのです。弟子として派遣される心構えにしていきましょう。

## 振り返りの質問

Q. イエス様が弟子の派遣の前に施した教育を私はよく理解しているでしょうか？ 隣人、弱い人への奉仕を実践しているでしょうか？

Q. 権能をいただいた弟子たちの宣教の成功には、小さな者として無償の恵みを神に願う謙虚さがありました。私には同じ心があるでしょうか？

Q. 癒しの権能までは与えられていない私たちが弟子として宣教するのは何が大切でしょうか？

#### 終わりの祈り 自分をささげる祈り（聖イグナチオ）

主よ、わたしの自由をあなたにささげます。わたしの記憶、知恵、意志をみな受け入れてください。わたしのものはすべて、あなたからのものです。今、すべてをあなたにささげ、み旨に委ねます。わたしに、あなたの愛と恵みをお与えください。わたしはそれだけで満たされます。それ以上何も望みません。



## 参考文献

『宣教者を育てるイエス』 カルロ・マリア・マルティーニ著 今道遥子訳 女子パウロ会1988年

『あなたがたは祈るとき』 カルロ・マリア・マルティーニ著 吉向キエ・池田敏雄 共訳 1983年 中央出版社

「弱さを身に負うがゆえに」 マイケル・J・バックレー 神学ダイジェスト 1985年 59号 P77～83